様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２３０３

研究課題名（和文）モダニズム文学における反近代主義――モダニズム文学とカトリシズムとの関連性の研究

研究課題名（英文）Anti-Modernism in Modernist Literature--A Study on the Relationship between Literary Modernism and Catholicism

研究代表者
野谷　啓二（NOTANI, KEIJI）

神戸大学・国際文化学研究科・教授

研究者番号：８０１６４６９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：カトリック的反近代主義とは、中世的価値に依拠して近代を批判する姿勢を特徴とする。具体的には①反議会制民主主義、②私有財産分配主義のような反放任資本主義、③イングランドの「栄光」をプロテスタンティズムに求める「ホイッグ史観」を否定する歴史観である。英国の反近代主義はアメリカ南部の農本主義とニュークリティシズムにも影響を与えている。代表はアレン・テイトである。南北戦争後、産業化、都市化の波に洗われ、北部「よりもヨーロッパ的な」、「古き良き」南部文化は衰退した。モダニズムの詩風を尊重しつつも、信条的には伝統に生きる哲学を求める態度は、個々人の判断よりも伝統を重視するエリオットから学ばれたものだった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
英文学とキリスト教信仰の関連研究は斎藤勇や石田憲次など、日本の英文学研究の草創期においては、欠くべからざる対象と認知されていた。しかし現代においては、この方面での研究は後退していると言わざるを得ない。とりわけモダニズム文学の分野では、神はつとに姿を消したと思われてきた。ところがモダニズム文学には、この世俗化の流れに抗する文学表現が20世紀初頭に出現し、戦間期を経て、第二次世界大戦後の一時期まで継続していた。そしてそのような文学の思想的内容にはカトリック思想を基盤にした反近代主義がみられる。本研究は新しい文学表現としてのモダンな文人たちのアンチモダンな思想的性格を究明しようとしたものである。

研究成果の概要（英文）：It looks like a paradox that Modernist literary poets chose anti-Modernism like Catholicism for their intellectual background. But they all share a sense of crisis that human conditions became worsened as the late Victorian culture and society opted for individualistic gains. Here they found Catholicism as a potential safeguard against dehumanisation caused by modern system fueled by Protestantism, which was dominant in Anglo-American established societies. What they fought against were (1) laissez-faire capitalism which empowered individualism, (2) parliamentary democracy, and (3) simple belief in progress, i.e., Whiggish historiography. Catholic and anti-modern and pro-medieval social philosophy resulted in their advocating Distributism (Agrarianism in America) and communitarianism. This philosophical background echoes their modernist poetics, which highly valued literary works with all-European or even global cultural scope rather than national and individual.

研究分野：英文学

キーワード：T.S. エリオット　G.K.チェスタトン　ヒレア・ベロック　アレン・テイト

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）英文学研究におけるキリスト教理解の必要性は広く認識されているが、政治的、文化的マイノリティであったカトリシズムの観点から英文学を考察するものは極端に少ない。本研究はこうしたいびつな状況をまず是正しようとする。（２）本研究は神学、教会史、英米史さらに政治・経済思想研究の成果をも取り入れようとする学際性に特色がある。（３）近代国民国家の中核に位置したイングランドのプロテスタント主流文化（近代文化）に抵抗するカトリック・イデオロギーが、モダニズム文学者によってどのように受容されたか、アメリカ南部のカトリック運動、さらにはフランスの新スコラ学と英文学との関係を含めて明らかにしようとする。

２．研究の目的

近代国民国家イギリスの中核としてのイングランドは、ナショナルアイデンティティを構成する文化伝統・規範としてプロテスタンティズムを選択した。本研究は、その外に位置し、それゆえ常に否定的な意味しか持ちえず、「異形なもの」として主要文化を聖化する敵対者の役割を担わされてきたカトリシズムが、20 世紀にはその「反体制的な」言説によって、かえってモダニズム作家の思想的営為に深い影響を与えた事実に着目し、モダニズム文学者がなぜ反近代主義者的立場に立つ必然性があったのか、19 世紀の英文学を超克しようとしたモダニストたちが共有したカトリシズムの諸相を、ヒレア・ベロックのカトリック修正主義的英国史観の検討から始め、第二次世界大戦に至るまでの T.S.エリオット、エズラ・パウンド、アレン・テイトらの思想を探求する。

３．研究の方法

本研究は、ヴィクトリア時代のオックスフォード運動を契機に、次第に認知度を高め、カトリック的なものがイングリッシュネスに包摂されたかに見え始めた 20 世紀前半において、新たな文学運動を創生したモダニズム文学者のカトリシズム受容によって、やはりその反動的特殊性が前景化されることになった状況に着目し、モダニストたちの社会・政治・経済論の背景にあるカトリック・イデオロギーの究明を目指すものである。20 世紀初頭のカトリシズムをめぐる政治・文化状況を、本研究の特色としてあげた歴史学、経済学、社会学、神学の学際的研究方法を駆使して理解する必要がある。その上で、ヴィクトリア時代を経て急速に世俗化したイングランド社会を是正する理念として、国民国家主義によらずヨーロッパ主義（クリスンダム、Christendom)的な、カトリックの価値観を導入しようとしたヒレア・ベロックの思想を分析し、つぎにアメリカから帰化し、アングロ・カトリシズムを選択して、イングリッシュネスの中枢に自らを位置づけることに成功したエリオットの「戦略」的カトリシズムを考察する。さらに、これら二人の周辺に存在したパウンド、ドーソン、マリタン、モーラス、マシス、テイトら、モダニズム文学者の思想形成に重要な貢献をなした人物群の社会、政治、経済思想を明らかにし、モダニズム文学に見られる反近代主義を分析する。

４．研究成果

20 世紀イングランドにおけるカトリック知的復興現象の担い手は宗教改革の荒波を生き抜いてきたレキュザントでも、19 世紀半ば以降、貧困を逃れ、工業国イギリスの安価な労働力として流入したアイルランド移民でもなく、多くはイングランド国教会からの改宗者であった。戦闘的カトリック知識人の代表的人物は、ヒレア・ベロックである。宗教改革以来、国是であったプロテスタンティズムの圧迫下、二級市民以下の扱いに甘んじてきたカトリック信者は、ロマン主義による中世主義的関心の増大によって勇気づけられる局面もあったが、20 世紀になってもなお劣等意識に苦しめられていた。しかし、第一次世界大戦前後にジャーナリズムで活躍したいわゆる「チェスタベロック」の二人によって、ようやく知的世界によって認知されるようになった。ベロックは盟友のチェスタトンに与えた影響もさることながら、ヴィンセント・マクナブ、エリック・ギルら、教皇レオ 13 世の社会教説に従う運動を展開した人々に支持され、のちの小説家ウォー、歴史家のドーソンに引き継がれていく思想状況を作り上げた。ベロックはカトリック教会の信仰に基づき反近代主義の立場、少なくとも近代の諸課題を中世の価値に依拠して批判する姿勢を明確にした。そのイデオロギーは①反議会制民主主義（君主制、しかし必ずしも血統によるものではない）、②反放任資本主義（私有財産分配主義 Distributism）、そして③近代イングランドの「栄光」をプロテスタンティズムに求める、いわゆる「ホイッグ史観」を粉砕しようとする歴史観で構成される。ベロックの思想は今日ただの反動的「ファシスト」とみなされている状況であるが、預言者的相貌を持って語られる彼の小説、批評、歴史に見られる直観的認識は、今日にも重要な視座を提供してくれる。

　モダニズム文学者の思想的営為を考えるうえで、アメリカ南部の反近代主義は興味深い。アメリカのモダニズムが南部の思想運動を背景にしていたという事実を忘れてはならない。南部のカトリック詩人・批評家アレン・テイトは、1922 年に刊行が始まった *The Fugitive* 誌の詩人で、T.S.エリオットに深い影響を受けている。また、上述したイギリスのカトリック文人、ベロックやチェスタトンの反近代主義運動、私有財産配分主義に共鳴するアメリカ南部の農本主義運動の主導者としても無視できない。フュジティヴ詩人たちの本拠地であり「南部のアテネ」を自負していたナッシュヴィルも、南北戦争後、産業化、都市化の波に洗われ、北部「よりヨーロッパ的な」、「古き良き」南部文化は衰退しはじめていた。テイトは、北部の金融資本主義に支えられる新しい南部を拒否し、家族主義、騎士道精神、名誉を重んじる南部の文化伝統にアメリカの真のアイデンティティを求めた。モダニズムの詩風を尊重しながらも、信条的には伝統に生きるすべ（哲学）を求める保守的態度は、個々人の判断よりも伝統に結びついた

哲学、神学、神話を重んじるべしというエリオットの考えから学ばれたものだった。
農本主義は、ただ単に生活手段としての農業ではなく、手段は生そのものを規定するから重要なのだという南部詩人たちの確信を生み、彼らは農業が必然化する人と人が有機的につながる共同体とその秩序に魅力を感じたわけである。金銭よりも土地の方に価値を置き、土地を所有しそこに住む人は自然と宇宙に帰属しているという観念を共有し、金融資本主義は道徳的頽廃をもたらすとして忌避した。このような農本主義は論文集の *I'll Take My Stand* (1930)と *Who Owns America?* (1937)によって主張され、エリオットの側からは南部ヴァージニア大学で行った講演 *After Strange Gods* (1934)の冒頭で賛意が示された。
英文学研究に大きな影響を与えた「新批評（ニュー・クリティシズム）」は北部のブルジョア・リベラリズムに対する抵抗として南部の農本主義を思想背景に現代社会批判の意図を根底に意識した文学研究運動であった。一般的には、作品の自律性を認め、社会コンテキストと切り離し言語構造分析に集中すると理解されたが、科学実証主義とは別次元の知的探究として、南部の伝統的家父長主義、有機的社会論を基盤として展開された近代産業資本主義を批判する保守の思想運動であった。この運動の代表がテイトであり、彼はT.S.エリオットのモダニズスト詩の推奨者であった。エリオットはモダニズム詩論を展開する中で、19 世紀的ロマン主義とヒューマニズムを批判、古典主義を唱道した。キリスト教との関連では、テイトと同様「原罪」を信じ、人間の限界を意識化したのである。
エリオットとパウンドに共通するのは反近代主義思想であり、ファシズムに対する親近感である。母国を棄て欧州に向かった彼らは、南部農本主義者と同じ、金融資本と労働運動の狭間で不安と不満を感じていた都市中間層の、近代啓蒙思想由来の自由主義、合理主義を否定して憚らないファシズムに理解を示した。保守反動主義者エリオットの誕生を告知する『ランスロット・アンドルーズのために』における「文学においては古典主義者」、「政治においては王政主義者」、「宗教においてはアングロ・カトリック」という宣言は、フランスのアクシオン・フランセーズ運動の指導者で王政復古を叫び暴力闘争も厭わないシャルル・モーラスに倣ったものである。「秩序とその守護者としての教会の復活について協働する限り、神を信じていようがいまいが構わない」と、単に教会の権威を借りるのみで、反プロイセン、反ユダヤ、反近代主義を特異なナショナリズムのベールで包むモーラスは、1926 年教皇ピウス 11 世により処断されたが、エリオットは『クライテリオン』誌上においてアクシオン・フランセーズ擁護を継続した。
モダニズム文学の担い手が反近代思想に依拠するのはパラドックスに見えるが、反体制ということでは一貫している。カトリックとなるモダニストが多いのは、体制派の悪弊の淵源をプロテスタンティズムに見出し、それが生み出した個人主義と自由放任型資本主義を拒絶しようとしたからである。カトリックの共同体主義によって個人主義から逃れ、表現としてはナショナルなものを超越し、ヨーロッパ全体、ひいては世界文明を意識した作品を理想とした。テイトが主導したアメリカ南部とマクナブが精神的主柱だった英国の帰農運動は反中央集権、反産業資本主義、反進歩史観を信奉するカトリック社会論に根差しており、土地所有を通して共同体を再生させようとする運動だった。*The New Age* の編集者だった A.R.オリッジはカトリック信者ではなかったが、彼のギルド社会主義思想には中世主義的な特質もあり、エリオットやパウンドから高く評価された。彼の雑誌にはチェスタトン、ベロック、パウンドも寄稿した。オリッジが経済学について述べた「経済学はコストを最小に、生産とサービスを最大にする方法を考える学問であり、関心は富の生産のみにあり、人間的状況は考察しない。産業社会では労働市場から適切な（技術などを備えた）労働力を調達した方が安くつく（労働のコモディティ化）ため、労働者は動産奴隷から賃金奴隷化する」という見解は、今日でも傾聴に値しよう。このような確信は、ドミニコ会士のマクナブのヴィジョンにも見られ、神学上は近代主義に対抗し、経済学としては私有財産分配主義に行きつく。モダニズム文学の思想的系譜は、カーライル、ラスキン、モリスの産業社会における人間の非人間化という問題意識を受け継ぎ、レオ 13 世の回勅『レールム・ノヴァルム』を経由して、盛期モダニズムのエリオット、パウンド、そして神学モダニズムのジョーンズに至る、ということになろう。
モダニズム運動が大西洋をまたぐ運動であったこと、その思想背景には反近代主義が存在していたことが理解された。また本研究の今後の展開としては、すでに日本 T.S.エリオット協会の学会誌で発表した書評のなかで述べたように、新しいモダニズム文学の視点として、英米では「神学的モダニズム研究」が盛んになりつつあることを踏まえ、2019 年度から 4 年計画で行うカトリックの芸術家・詩人であるデイヴィッド・ジョーンズを中心とした科研プロジェクトに引き継がれる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　2　件）
①野谷啓二、デイヴィッド・ジョーンズの詩学――神学的モダニズム序説、国際文化学研究、査読なし、51、2018、59-81
②野谷啓二、コンラッドの眼の下でーーT.S.エリオットの見た闇の奥、コンラッド研究、査読なし、7、1-23
〔学会発表〕（計　3　件）

①野谷啓二、エリオットと幽霊、日本T.S.エリオット協会、2017
②野谷啓二、Eliot and the Noh Plays、T.S. Eliot Society、2016
③野谷啓二、コンラッドの眼の下でーーT.S.エリオットの見た闇の奥、日本コンラッド協会、2015
〔図書〕（計　2　件）
①野谷啓二、開文社、オックスフォード運動と英文学、2018、232
②野谷啓二　他、開文社、教養主義の残照、2018、294（195‐222）
〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：高柳　俊一
ローマ字氏名：TAKAYANAGI, Shun’ichi

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。